

公民科教育法の授業

— 振り返りメモにみる学生の意識の変容 —

吉 岡 直 子

Class Report of the Methods of Civic Education : Change in the
Consciousness of Students Judging from Reflection Memo

Naoko Yoshioka

学習指導要領改訂における公民科の再編成方針（現代社会の廃止と「公共」の創設）やアクティブラーニングの導入（「次期学習指導要領等に向けた審議のまとめ」中央教育審議会教育課程部会 平成 28. 8. 26）、18歳選挙権の実施と成年年齢引き下げの動きなど、高校公民科は大きな転機を迎えている。本報告は、本学教職課程科目である「社会科・公民科教育法Ⅰ」のグループワークを中心とした授業における受講生の意識の変容を明らかにしようとするものである。

はじめに

学習指導要領改訂における公民科の再編成方針（現代社会の廃止と「公共」の創設）、アクティブラーニングの導入、18歳選挙権の実施と成年年齢引き下げの動きなど、高校公民科は大きな転機を迎えている。また、ニートや引きこもり、社会的無関心など若者をめぐる問題状況もかねてから指摘されており、社会参画の能力と責任を有する主体形成は若者の成長発達保障の重要課題でもある。公民科教育法は、教師として高校生の学びをどのように支援するかとともに、受講者である学生＝若者が自らの問題としてそれにどう向かうか、という二つの課題を擁していることになる。筆者担当の本学教職課程科目「社会

科・公民科教育法Ⅰ」では、グループワークを中心とした授業を試みてきたが、本報告はそこにおける受講生の意識の変容を授業後の振り返りメモから明らかにしようとするものである。

「社会科・公民科教育法Ⅰ」（「社会科・公民科教育法Ⅱ」とともに必修）2016年度受講者数は34名（4年生3名 受講中に教育実習を行った）3年生11名 2年生20名、5学部・学科（法経商国際文化社会福祉）である。男性22名、女性12名と、女子学生が多い本学にしては男子学生が多い。

授業の展開はおおよそ次の通りである。公民概念、公民教育と公民科（定義、歴史、法制等）の概観、現行学習指導要領の確認、公民科授業のビデオ視聴、18歳選挙権、シティズンシップ教育等、グループワークによる授業づくりと評価、授業全体の振り返り。グループワークによる授業をもとに、各自が50分の授業を構想し学習指導案にまとめることを最終課題とした。

1 公民科に対する受講生の認識

（1）高校での学び

公民科の履修履歴を確認したが、曖昧で中には「全く履修したことがない。」という者もある。受験科目としては暗記、受験科目でない場合は比較的自由的な内容、という傾向が読み取れる。暗記ばかりで面白くなかったという一方で、面白かった・楽しかったという者も少数ではあるが存在する。

【高校公民科の授業について】

- ・ 授業時間が足りず、教科書の3分の1。後は自分でやるように！という感じ。世界史・日本史との扱いの差が歴然としていて不安だった。
- ・ 先生が淡々としゃべり、実践的な知識として何も身につけていない。
- ・ いろんなところを少しだけかじって印象。倫理のキリスト教、現代社会の経済のところが好きだった。
- ・ 丸暗記のイメージが強かった。
- ・ 現社：青年期のあたりが難しかった。倫：さっぱり分からなかった。偉人

の考え方が理解不能だった。政経：難しかったが一番興味を持って学習した。

- ・ 倫理の先生は途中で昔の人の話をしてくれたり、面白かった。
- ・ 教科書通りではないが、授業の内容すべてを先生自身の生活にからめて話しだす内容。先生のお小遣いから経済、夫婦喧嘩から男女共同参画社会。そんな授業をしたい。
- ・ 倫理は興味がある内容だったのでよく勉強していたが、政経はつまらなかった。
- ・ 教科書を読み、重要語句だけをただ暗記し、テストをするという授業。
- ・ 先生が一人で話していて、周りもあまり聞かず雰囲気ではなかったため、頭に入ってこなかった。
- ・ 先生の話の聞いているだけ、必死に暗記しているイメージ。
- ・ 現社というよりも道徳の時間にあてられていて、現社を学んだ実感があまりない。
- ・ 現代社会は関心が少しあったので、なんとなく勉強していた記憶はあるが、ほとんど忘れてしまっている。倫理は難しく途中で諦めた。
- ・ 受験がなかったので、何のプレッシャーもなく楽しかった。暗記が苦でないのも一つの要因。
- ・ 受験科目として使わない生徒がほとんどのため、スピードも遅く、試験範囲も10ページないくらいだった。
- ・ 先生が面白かったので、割と楽しかった。
- ・ 受験がない人たちのクラスだったので、テスト対策というよりも、DVDやニュースを沢山見ている。
- ・ たまにおもしろかった。
- ・ 元々社会科目が好きで自習は楽しく、授業も分かりやすかったが、正直苦痛な時間であった。
- ・ 暗記ばかりで面白くなかったが、その内容自体はニュースとの関連で理解が深まり好きだった。倫理は先生の授業が楽しくもあり先人たちの考え方、思想を聞くことは考え方が広がり、良かったと思う。

- ・ 政治についてはとても面白かった。経済は苦痛でもあり、そんなには取り扱わなかった。
- ・ 試験前にプリントを丸暗記。
- ・ 先生が左翼の人で、とても偏っていて、よろしくないと思いながら受けていた。
- ・ 穴埋め、センターの過去問をひたすら解くなど、授業を面白いと感じなかった。

高校公民科がどのような内容であったかを確認する意味も込めて、第1回の授業で大学入試問題（本学「政治経済」）を解かせた。正答率は約4割であった。入試問題の結果について、大多数の受講生が知識の剥落を痛感し、それは入試対策として暗記するだけの付け焼き刃の知識であったことによると考えている。一方で、少数ではあるが「以外に解けた。」という者もある。高校の授業が面白かった、新聞を読んでいる、学部の授業など自らの専門性に自覚的である等の場合、正答率が高かったようである。また、「これではいけない。」と発奮するコメントもあった。

【大学入試問題を解いてみて】

- ・ かなり知識が落ちていた上、「そもそも知らない知識」が多くあった。
- ・ 習ったが忘れていた部分も多かった。
- ・ 高校では詳しくやっていたいなかったので、初見などころが多々あった。
- ・ 難しかった。
- ・ 知識が曖昧だった。
- ・ 分かるようで分からないといった曖昧な知識しかないことが分かった。
- ・ 一般常識的に知っておくべきことが沢山ある。
- ・ 見たことのある選択肢だったがほとんど忘れていた。
- ・ 語句を自分で書くところがほとんど分からなかった。
- ・ 地理のみ履修。公民は全くやっていない。経済や政治に関することは若干知識があったので、テストはそこまで難しくはなかった。

- ・ 勉強したことの無い科目で、聞いたことのあるのしか分からなかった。
- ・ あまりの出来に、もう一度勉強し直そうと思った。
- ・ 学部でやっている部分は覚えていたが、それ以外はダメだった。
- ・ 現代を生きていけば耳にすることのあるものが多かったので、生活に関わりが深いと感じた。
- ・ 現在の社会とかなり密接な繋がりのある分野だと思うので、基礎からしっかり分かっていたら。
- ・ 以外とできていた。まともな授業も受けていないのにすごいと思う。
- ・ 全然知らないことばかり。「教える」どころか「知識」が足りていない。
- ・ 経済学部で1年学んだのだから、もっとできないといけないと憤りを感じた。

(2) 「公民」に対する認識

高校での学びを振り返った後で、公民概念＝「公民とはどのような者・存在と思うか」を尋ねた。大多数が「公民」と「公民科」とを混同して回答し、公民概念について述べた者はわずかに下記の2名だけである。高校で公民科を履修してきても、明確な公民概念は得られておらず、公民科の輪郭はおぼろげである。この後、「公民」「公民教育」「高校公民科」について概説的授業を行った。

【「公民」とは】

- ・ 自分自身の意志を持って生きる国民
- ・ 広い視野をもって社会のことを理解し、貢献するという意味での国民

2 公民科授業の実際を知る

第4回、第5回では、視聴覚教材を用い、公民科の授業の実際を垣間見る時間とした。教育実習を間近に控えた受講生がいることを考慮したものでもある。

「教師教育教材 授業を学ぶ『公民科・現代社会を例に』 教育実習 高校編」「教師教育教材 教育実習生の授業～その変容を見る～」財団法人 放送大学教育振興会

視聴後の感想は授業をするということ、公民科の授業の性格・特色、授業準備や授業の工夫、教育実習など多岐にわたったが、以下は公民科に関する感想である。教え込むのではなく考えさせることの重要性、生徒の興味・関心を引く授業とそのための様々な工夫や留意点（発問、表現、事実と考えとの峻別）等への気づきが見られる。

【公民科の授業について】

- ・公民科の授業は、他のどの授業よりも自分の考え方や思想、気持ちが入る教科だと思います。だから、考え方が固まった授業になってしまう危険性もあると思いますが、一番面白い授業がつくりやすい教科だとも思いました。生徒の興味が引かれる内容を工夫すれば、生徒もついてきてくれると思えました。
- ・社会科の授業はどうしても伝えるべき情報量がすごく多くそして、細かいと思うので、一方的な授業になりやすいところを悩んでいるところが印象的だった。それでも生徒の顔が上がってきて、反応等が良くなってくると、授業がやりやすくなって、そして、やりがいというものを感じるのだろうかあとと思った。
- ・やはり高校の社会の授業は専門的な内容もあるため、どうしても板書の時間が必要だと思います。しかし、このビデオの実習生くらい、生徒に考えさせることができれば、興味を持ってもらえるような授業になるのではないかと思います。ただ、これは私個人の意見ですが、顔が上がるのではなくて、顔を上げたくなるような授業を先生が展開すべきだと思います。
- ・正直なところ、自分は今まで社会科の授業に興味がなく、ほとんど寝ていました。教育実習生としては、そんな生徒が興味を持てるような授業をしないとイケません。生徒に質問ではなく発問させるとか、表現に気をつけるなど行った工夫が必要だと思いました。また、いろいろな生徒がいるので、表現などには気をつけないとイケないと思えました。
- ・先生が実習生に対して言っていた発問（先生が生徒に質問すること）は、自分の現代社会の先生はやったことがなかったので、実習に行ったら使ってみ

たいと思いました。自分のイメージ通りにいくことが少ないと思うので、そこでどうするのかをイメージできる人になれたらいいと思います。

- ・教え込むのではなく興味を出させるということばにハッとしました。これは理解していてもなかなかできないことではないかと思うし、難しいことだと思う。しかし、教え込むよりも子どもが興味を持っていることが定着しやすいと思う。このようなことを心がけていきたいと思った。
- ・授業をただ単にすれば良いというものではなく、「公民」の場合は特に興味を引く授業をしなければならない、学生の興味を引くためにはテーマを決めるだけでなく、どのような言葉を使うかということば選びも重要になってくる。一言一句考えて、50分間話さなければならないのは本当に大変だろうと感じた。
- ・事実と考えをしっかりと区別して教えていかなければいけないと思った。だからといって事実を知識として教えるだけでは、子どもたちの力にならないため、何故そうなるのか、それについてどう思うかなど考えさせる部分をいかにつくるかが重要だと思う。社会科の授業は特に、子どもたちの身近に感じるようなテーマを用い、知っておくべき内容を教え、考えさせていくことができるように取り組む必要があると思う。

3 グループワークによる授業づくり

大多数にとっては初めての授業づくりである。授業の「型」にはあまりこだわらず、グループでテーマを設定し、資料を持ち寄り議論しながら全体の流れを考えることを重視した。「政治を身近に考える」を共通テーマとし、全体を5グループに分け、選ばれた1人が25分の授業を行う。各グループのテーマは「18歳選挙権」「高校生の政治意識」「ブラックバイト」「直接民主主義と間接民主主義」「消費税」であった。

感想からは高校生の実態について調べる中で、自分自身の有り様（政治や社会への関心、知識が足りないことなど）についても考えを及ぼすようになっていくこと、受け身ではない生徒主体の授業を意識し、生徒の興味を引き出すような様々な工夫を試みたことがわかる。また、他者の意見を聴き自らの考えを

深めること、話し合いを重ねていくことの楽しさを感じている様子もうかがえる。

【授業づくりの感想】

- ・ 高校生の考えやデータを見ていると、私も高校生も同じくらい政治や選挙について知識がなく、次の7月の選挙にも不安を抱えていることに気付いた。高校生に今授業をするなら、同じ目線で一緒に政治について考えを深めていくような授業を展開したいと考えた。
- ・ 政治は難しいテーマであるが、少しでも関心を持ったり、考えなければいつまでも難しく避けてしまうのではないか。身近なもの（難しくないこと）から自分で調べることで新たな発見や興味が生まれるのだと思った。私も有権者であり、今回が初の投票だ。自分なりに考え、しっかり意思表示しなければならぬとこの授業を通して改めて感じた。
- ・ 公民科の講義の中で何ができるのかを考えた。少しでも多くの政治に関する情報を講義の中で取り上げ、高校生中学生に選挙権が与えられる前の段階でできる限り知識を蓄えてもらおうということです。この考えには公民科のカリキュラムに関する問題や、授業時間の問題、いろいろあるということも話し合いの中で出てきました。
- ・ GWを通して自分自身も主体的に政治について考えることができた。普段はニュース番組であったり、新聞を見るなど受け身の姿勢であった気がする。見るだけでなく、ある報道を見た後に自分の意見や考えを持つべきであると考え。私にも選挙権が発生する。私はたとえ支持する政党がなくても行こうと思う。
- ・ 話し合いで自分の考えていなかった意見などが出てきたので、新しい発見があってよかった。話したことから、やはり多くの人が政治について興味を持つべきだと思った。
- ・ GWを通して、教師主体ではなく生徒主体の授業を組み立てなくてはならないことや導入部分の教師の発問に重きを置いて、生徒の興味・関心を引きつけ、生徒の集中力が持続するような授業計画を練らなくてはならない

ことの重要さと難しさが分かりました。

- ・ 「分かっているつもりだけど分かっていない」を「分からせる」のが教師の役割で、その為には生徒主体の学習を取り入れていかなければならない。様々な切り口からのアプローチ、生徒に調べさせるなど。
- ・ 自分の知識が圧倒的に足りないと思いました。テーマを話し合おうとしても、知識が不足しているため、話が発展せず先に進まないことがありました。
- ・ アクティブラーニングは便利な授業形態であるが、これが合わない人間もいること、適切な場面ではないと逆効果であること、入念な下準備があることに気付いた。

4 授業の振り返り 公民科・公民教育に対する認識

授業最終回で「公民科・公民教育に対する認識の深まり」を尋ねた。グループワークが受講生同士で政治や社会的な事柄について議論を交わす機会になったことがあげられており、そのような機会がほとんどないと思われる学生たちにとって、政治や社会について正面から議論をすることは新鮮な経験だったように思われる。

筆者の反省点として、政治的中立性についての言及が十分ではなかったことがある。「中立性」や「客観性」について積極的に議論をし、そこでの教師の立ち位置についてもさらに考えさせることが必要であった。

【公民科・公民教育に対する認識の深まり】

- ・ 教育基本法 14 条第 1 項や同条第 22 項においての意味のとりかたで生徒の政治的判断能力を訓練することを避けてきたことで政治的リテラシーが育っていないことがわかった。
- ・ 主に 18 歳選挙権について考え、以前知ることが無かった知識を知り、理解が深まった。しかし、深まれば深まるだけ、それを人にどう伝えるべきかという新しい課題も出てきた。
- ・ 中学・高校でほとんど公民をやっていなかったため、あまり理解がなかった

が、政治への関心、若者の実態や課題が少しだけ把握できた。また、教科内容と狙いが何なのかを考えることができた。

- ・ 公民科教育の大きな役割とそれを教える責任とが分かった気がする。
- ・ 言葉選びや自身の意思を出さないようにする等、他の科目に比べ、多くのことに配慮しなければならないことを知り、難しいがやりがいのある科目だと思いました。
- ・ 個人個人にある権利を確認することができ、理解が深まったと思う。
- ・ 以前に比べて、公民教育がどのようなもので、指導の手順はどのようなものがあるのかが具体的にイメージできるようになったし、生徒との関わり方や教材の工夫に留意しなければならないことがわかった。また、教えるにあたっての知識が足りないのので、これからしっかり勉強していこうと思う。
- ・ 今までは、座学としての公民しか考えてこなかったが、税金や社会保障などより詳しく政治や経済に関心を持つことができた。
- ・ やはり普段考えることは少ないテーマなので、グループワークでの意見交換で新たな意見を聞いたり、日本の課題点（公民科目について）たくさん考えることができてよかったです。新聞もたまにですが、やはり図書館で空いたら読むようになりました。
- ・ ただ単に、制度や概念、社会問題を教えるのではなく、どのようにそれらと向き合うか、自分にできることは何かを考えさせることも重要であると分かりました。しかし、噛み砕いて話した後は、学問的な論点をしっかり押さえることも大事であり、その為には、やはり教師の知識量などが問われると思いました。
- ・ 教えるということは簡単なことではないのだと思いました。
- ・ 特に模擬授業や話し合いなどで教科書には載っていないこと、載っていても小さく載っていることについて知ることができました。
- ・ 実際に授業をつくってみたりして、知識だけでなく考えていかないといけないという部分もあったりして、高校時代の覚えるだけの教科というものではなくなったため、いろいろな分野について、知って、考えてみたくなった。
- ・ 公民教育というのは、人の人格を変えることができるようなものだと思った。

教え方によっていくらでも良い方向へ変えることができるのではないか。

- ・先生が生徒に伝えるためには、様々なことを知っとかないと伝えられないと思った。公民は、日本のことについての授業だが、その中で地歴についてもふれないといけないと感じた。
- ・グループの人たちと話すことによって、同世代のみんながどのような公民的なことについて興味があるのかが知れて、自分ももっと知りたいと思うようになった。
- ・つまらないと思われるような授業はしたくないと思った。
- ・教科書に書いてあることを覚えることが公民の勉強ではなく、教科書に書いてあることについて考え、実行していくことが公民教育なのだと思いました。
- ・いろんな考え方が聞けて、様々な視点から考えられるようになった。
- ・なかなか大学でも詳しく学ぶことがなかっただけに、詳しく、周りの大学生がどう思っているのかを考えながら学ぶことができた。
- ・理解が深まったかどうか、そうでないかは正直分かりません。ですが、授業をつくったり、発表したり、レポートを書いたりといった講義内の活動を通して、より興味をかきたてられたと思います。
- ・公民は高校の時に少ししか触れてきませんでしたでしたが、この講義では学ぶ側ではなく教える側であるので、地歴等よりかは大変苦労しました。教える側に立つてみることで、現代問題となっている政治に目を配るきっかけになり、公民に対する知識の理解も自ずと深まった。
- ・実習が中学校だったため、高校生相手の授業というのを考えることが新鮮だった。模擬授業で5通り見ることができ、様々なやり方を知ることができ、自分もこの方法でやってみようというものがあった。
- ・どのようなことに気をつけて授業をすればよいかなど深まりました。教壇に立つ時も十分気をつけたいです。
- ・今まで公民の授業といえば、教科書の難しい単語を覚えていれば良くて、公民がここまで現代の社会を考えるきっかけになるとは思ってもいませんでした。公民についての大切さが今まで何となく大切かな、という考えでしたが、公民の大切さについて考えが深まりました。

- ・改めて、公民科は難しいな、と思った。いちばんは自分の知識不足と世の中を知らないことが分かった。授業テーマを決める時に、全然知識がなくて、それから新聞を読んだり、ニュースを見たりするようになった。深まったというよりも、きっかけになった。
- ・様々な制度や決まりについて、表面だけの薄っぺらい知識では教師はつとまらないと思った。その制度の歴史や成り立ち、存在意義など、詳しく知ってやっとならなければならない。また、知っただけでは満足せず、反省をしてどんどん知識を増やし、多面的に見ることができるようにならなければいけない。そしてよりよい授業を造り上げていかなければならない。

5 公民科教育法での学びと投票行動

18歳選挙権は授業の中でも何度か取り上げた。授業期間中に実施された参議院議員選挙（第24回参議院議員通常選挙 2016.7.18）における投票の有無を尋ねた。「投票に行った」は28名中19名、70.3%であった。これは、母数が少ないとはいえ、18歳の投票率（全国51.17%、福岡県49.35%）、19歳投票率（全国39.66%、福岡県40.25%）、20代投票率（全国33.37%）、全体の投票率（54.7%）をいずれも大きく上回る数字である。投票に行かなかった9名中8名までが「住民票が実家にあり帰省できなかった。」と答えている（時間がなかった1名）。これは特に学生などの低投票率の原因の一つとしてかねてから指摘されているところである。

【投票に行った理由】

- ・自分の選挙権をきちんと行使しようと思ったから。教師になる人間として生徒に政治について教える立場なので、自分がまずは行う必要があると思ったから。
- ・主権を持っている責任を果たすため。世界や日本や社会を少しでも良くしたいと思って教師になりたいと思っているが、その職業でやれることには限りがあり、政治の果たす役割はやはり大きい。その政治に関わり、社会を動かす数少ない方法が選挙だと考え、選挙に参加した。

- ・一票の格差はあるけれど、自分が動かなければ人の意見も変えられないし、税を払ったことに対する対価だと思っているから。
- ・一人暮らしの兄も帰省したので、家族全員で祖父母の家に行くついでに。
- ・教職の授業などで沢山選挙関連のことをやったから興味があったから。
- ・親が選挙に熱心だったから。
- ・この授業で選挙についてよく考える時間もあつたし、18歳から選挙権が与えられたにもかかわらず20歳が政治に興味を持たないのはどうなのかと思ったため。でも最近、本当に世界で何が起きているかには興味があります。
- ・公民を教える立場の人間が行かないわけにはいかないだろうと思ったから。権利があるからこうしたまでだ。
- ・特に面倒だと感じることもなかったので、当たり前だと行って行った。
- ・いろんな党、候補者の公約を新聞で読んで、どの党、どの人にもいまいち信用・信頼があずけられなかったが、行かないより行った方が良いと思い行きました。
- ・今年20歳で初ということもあり興味があつた。前日からワクワクしていた。法案や今後社会が大きく変わりそうな政策など目白押しで、これに投票しないわけにはいかないという思いと、学部の授業で憲法を学んだのがその一端にあると思う。
- ・はじめて選挙権がもらえて嬉しかったから。18歳になった妹も一緒に行った。普段親は投票に行かないが、今回は家族全員投票した。
- ・日本国民である以上、投票するのは義務だと思うから。
- ・権利があるから行ったし、一回やってみたかった。
- ・初の投票に興味があつたから。政治に関わることが嬉しかった。少し勉強をしていった。
- ・興味があつたから。
- ・友達から毎日選挙に行けとLINEがきたから。
- ・この日本という国で生きるなら選挙に行くのは当然だから。選挙に行かなかったら政治で何をされても文句を言えないため。

・自分が共感できるマニフェストを掲げている人がいたから。

18歳選挙権問題が授業の一つの核になったのは必然だったともいえる。授業は18歳選挙権の施行と時期的に平行し、受講生の過半数がまさに18歳選挙権の当事者だったからである。授業の中で高校生の実態、政治との関わり、政治や社会をどう教えるかをともに考えてきた。それらを自らの問題として捉え返したことが投票という政治的意思決定過程への参加につながるきっかけとなったとすれば、望外の喜びである。

西南学院大学人間科学部児童教育学科